

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4490100213		
法人名	大分県医療生活協同組合		
事業所名	グループホーム六本松二番館		
所在地	大分県大分市津留字六本松1970-7		
自己評価作成日	平成22年3月12日	評価結果市町村受理日	平成22年6月17日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://ap.oita-kaigo.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=4490100213&SCD=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人第三者評価機構
所在地	大分市大字羽屋21番1の212 チュリス古国府巻番館1F
訪問調査日	平成22年3月23日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・岩田団地の方の協力があり、交流している。 ・食事作りを利用者と一緒にして、同じものを一緒に食べている。 ・入所者がのびのびしている。 ・デイサービスの車を借りて外出できる。 ・源泉掛け流しの温泉がある。 ・大分川や裏川公園が近く、環境がよい。 ・費用が安い。 ・面会に来やすい便利な場所にある。 ・職員が真面目で介護に熱心である。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

大分川河畔に立地し、居住・生活空間としても最良の環境にある六本松、その二番館としてオープンして一年。同一敷地内の六本松を安易に模倣することなく、職員体制や教育、入居者や職員の不安など、多くの課題を抱えつつも二番館としての独自性を模索し続けた点は高く評価できる。特に「入居者の心の安定」を第一義に掲げ、「終わらない業務は臨機応変に職員全員で協力し合う」ことを通して、二番館としての存在感を鮮明にし、方向性も明確に打ち出せている。入居者が野菜作りや掃除等で職員と協同する姿にこそ、この一年の成果が如実に現れている。「ホーム内の安定を目標にした活動」から、これからは「地域へ活発に出て行く活動」も高く期待できる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	その人らしく地域と共に暮らし続ける事を目指した理念を、管理者と職員とで共有できるよう、申し送り時や職員会議などで話し合い確認し、利用者や家族の支援をしている。	2棟目の施設として地域密着型サービスの意義は共有されており、二番館独自の理念を創出しようとする姿勢は高く評価できる。入社時以外、日々の業務で理念の共有と実践に触れることが無いようである。	理念の表示が、他の掲示物と混在されて目立たない。理念とは、二番館が目指すサービスのあり方を示すものだけに、日々の業務の中で機会あるごとに再確認しあう必要があると思われる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	食材等の買物は近隣の店舗を利用し、地域の催しに参加したりと交流がある。事業所の行事に地域の老人会の方々等の参加もあり、顔見知りになり、よく声をかけてくれる。	老人会の人達が話し相手などで日常的に訪問しており、近隣住民も二番館の防災訓練等に率先して参加している。自治委員や民生委員等も協力的であり、施設側も催事の誘いや会報の配布等を通して積極的に地域交流を図っている。	二番館は、地域住民の一員として積極的に活動しており地域に不可欠な存在となりつつあるが、地域から独自性を認められる為には今後どのような取り組みで臨むのかを明確にする必要があると思われる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域包括主催のケアケア交流講座に場の提供をしたり、見学者に学習会の参加を促しなど多くの人々に認知症の理解をしてもらえるよう活動している。また、2年に1回の健やかまつりで介護相談を受けたり、施設見学をさせていただいている			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議には、家族、自治会長、市の担当職員、地域包括支援センター職員、ホームの介護職員等の参加がある。そこで報告や話し合いを行い、サービス向上に活かしている。	2ヶ月に1度の運営会議は、一番館との合同開催で、事前の話し合いや議題等の検討も共同である。会議録の記入保管はなされているが、その内容を整理し、十分に活用するには、いままじの時間的余裕が必要のようである。	二番館としての独自性や方向性を決定づけるためにも、運営会議の独自開催が望ましく、サービス向上へ活用しやすくなるのではなかろうか。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市の長寿福祉課の職員は運営推進会議に参加し、助言をいただいている。生活福祉課の職員も時々立ち寄り、利用者の様子を報告し相談をしている。地域包括支援センターの職員とのつながりもできている。	運営会議には市職員も毎回出席しており、ケースの状況に応じて生活福祉課職員の来訪もある。その機会を活用し、個人ケース等の相談や助言を積極的に求めており、行政との連携も非常にスムーズである。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員会議等で学習会を設け、代表者および全職員が身体拘束をしないケアについて理解をし、実践している。日中の玄関の施錠はしておらず、自由に出入りが出来る。今後毎年1回学習会をしていく。	研修会には極力参加できるように心掛けている。研修後の報告は求められているが、それについての他職員への研鑽に繋がっていない。	勉強会は年1回だけの開催である。研修参加者が講師となることで、サービス向上にも役立ち、共有意識の育成にもなると思われる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員会議で学習会を設け、管理者や職員は高齢者虐待防止について理解している。管理者は職員の言動が利用者の尊厳を犯すことのない様指導を行っている。利用者に異常がないか観察し防止に努めている。			

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員を対象に年1回学習会を行っている。利用者に対しても必要に応じて、日常生活自立支援事業や成年後見制度の活用を検討し、本人及び家族と相談又は支援をしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	事前に利用者及び家族の不安や疑問などに、丁寧に説明し納得して頂いた上で重要事項、生活上のリスク、看取りや他機関との連携体制を説明している。契約解除の際にも十分な対応を行い支援を行う。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者の言動や表情・周囲の状況を見逃さないようにしている。その都度、利用者の話を聞いたり、環境の改善に努めている。	意見箱への投書は開所以降1件も無く、面会時の家族からの苦情も無い。ただ本当に苦情が無いのか、有っても伝えづらいのかは不明である。4月と11月に家族会を開催したり、独自の満足度調査も実施している。	苦情が皆無なのは、「利用者の心の安定」を第一義に取り組んだ結果であろうが、苦情の記入方法なども改善し検討する必要がある。また未集計の満足度調査は集計記録して活用すべきと思われる。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	個別または申し送り時や職員会議で話し合い、意見を聞き、運営に活かしている。	職員との連携や職員間の連絡も徹底されている。引継ぎ事項も毎回記録し報告されており、特段の問題点は無い。ただケア中に「ひやり」とする事があったようであるが、職員からの報告後、即時に対応を検討し、対策も講じられたようである。	一番館だけでなく、他機関との交流や職員相互の研鑽を検討しているようである。他機関と交流することで、職員個々も大所高所からの視点で、ケアサービスを考慮する一助にも繋がると思われる。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は労組によるアンケートにて、平均残業時間や給与その他の要望等を聞いている。また、管理者は利用者の変化に応じて学習会の開催や業務の改善等をしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の力量チェックを定期的に行い、管理者が評価・指導するシステムがあり、実施している。教育の年間計画を立案し、外部研修にも参加できるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	宅老所・グループホーム大分県連絡会の会議に参加したり、他事業所を見学し、介護サービスや運営方法を参考にしている。今後、相互に職員を受入れ、研修する予定である。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所の相談や申込みがあった際は、本人家族にホームを見学して頂き、お試し入居も実施している。本人の自宅や入所施設を訪問し、これまでの経緯や現在の生活状況、要望等を把握するよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	相談時には本人や相談者の困っている事、不安な事、要望等をよく聞き、支援の方法などを一緒に考えている。何時でも相談を受け付けるなど、相談者が安心していただける様、対応している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や相談者の心身の状況や生活環境等を確認し、当事業所以外のサービスも視野に入れ、支援の方法等を検討している。急を要する相談者には地域包括支援センターの紹介や他の事業所情報を提供している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は食事の活動を中心に、利用者から料理を教えてもらう等、共に支えあって生活する関係作りを行っている。また、利用者が日常生活の活動をゆっくり職員と行えるよう支援している。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族と一緒に利用者を支えていけるよう、利用者の様子やホームの状況についても電話や報告書やニュース等で報告したり、家族の面会時は一緒に話したりして、共に支えていく関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居時やその後、家族に積極的に情報の提供をお願いし、できるだけ長い間、家族や友人などのなじみのの人に会ったり、なじみの場所（自宅など）に行けるようお願いしている。	事務局が3ヶ月に1回、広報紙を発行し、二番館の様子を家族や関係者に郵送している。来訪や電話連絡も常時実施している。散歩中には自宅に立ち寄らせることで地域に暮らす友人知人との交流に繋げている。	認知型施設として、馴染みの人や場との継続的支援が特に有効であるので、二番館独自の企画・運用などもその点を考慮するべきだと思われる。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者間の人間関係を把握し、食事の際座る席を工夫したり、気の合う方同士で居室の訪問をしたり、外出やゲームを楽しむなど、人間関係が良くなる様に支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスが終了しても、希望や必要があれば、訪問したり、相談して下さるよう、声掛けしている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人本位のケアの為に、利用者の生活歴や希望を把握し、生活の中に喜びや生甲斐が感じられ、その人らしく生きられる様アプローチしている。介護上の問題がある場合、本人の気持ちや希望に立って考えている。	入居者に栽培好きな人が多いことから、畑作りをし、野菜や果物などを栽培している。毎日の水遣り草取りから収穫まで、全てを利用者が行い食材に活用することを通して、日常生活の喜びに繋がりを、生き甲斐を感じさせているようである。	年間を通して栽培に関与できており、ほとんどの入居者が進んで朝早くから庭園に集まるほどである。ただ栽培だけに限定することなく、幅広い視点での別の取り組みも検討する必要があると思われる。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方の情報を入居時や入居後も入居者や家族から聞き、アセスメントしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの生活のスタイル・心身状態、できる事、できない事等の全体像を把握する様努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族には日常的な暮らし方について、医師や薬剤師にも課題やケアについて意見を出してもらい、ケア計画に反映している。	母体が医療機関であり、入居者のケア状況に応じた情報も詳細に記録されている。家族からの要望も積極的に受け入れて、介護計画に如実に反映されているようである。	開所一年間で、二番館独自の「サービス提供のあるべき姿」を模索した姿勢は評価できる。独自性や方向性を確立するには、施設、入居者、家族に加え様々な支援機関を、チームとしてどう取りまとめていくかだと思われる。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子やケアの内容を個別記録に記入し勤務前に読んだり、申し送り、ミニカンファで介護計画を見直している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者に何かしらの変化があれば利用者またはその家族と相談し、必要と思われる他のサービスや制度等の情報も併せて提供し支援している。また、デイサービスのボランティアによる催しに参加したり、認知デイの利用者との交流もある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の民生委員・住民・ボランティアの協力を得ながら、利用者を支援している。岩田団地防災士が、運営推進会議に出席し、防災と避難の方法をアドバイスしてくれた。消防は本部と共に指導をうけ訓練をしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者、家族の希望を確認し、けんせいホームケアクリニック・けんせい歯科による訪問診療を利用している。また、他の医療機関に受診の必要があり、家族環境により、家族による通院援助が出来ない際は受診が円滑にできるよう支援している。	ほとんどの利用者が緊急時の対応が出来る健生ホームケアクリニックに変更している。月2回は定期的な訪問受診をしている。その結果と報告は家族に行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週4日ほどの1～3時間看護職員が支援に入り、利用者の健康管理を行っている。看護職は訪問診療記録や職員からの相談により、利用者や職員の指導・援助を行っている。また、可能な限り介護業務に携わり利用者の変化に気を配っている		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院する時は、利用者の心身の状態やケア内容の情報提供をし、不安・不穩の軽減に努めている。入院した際は職員が度々面会に行き、早期に退院できる様、主治医や看護師・リハと話し合いをしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合や終末期のあり方については入居時に希望を聞き、相談に応じている。かかりつけ医も終末期医療については積極的である。法人内の訪問看護ステーションの協力も得ることが出来る。チームとして援助したい。	今後終末期に向けた方針で支援していく予定である。終末期の対応指針も契約書の中に定めている。連携体制も同じ法人の中で協力出来る体制が整っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	入所者の急変や事故発生時に備え、全ての職員が応急手当や初期対応できるよう、1年に1回学習会を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練は在宅センターすこやか全体とホームとで、2回行った。近隣の職員や応援体制がある。岩田団地の方にも、協力をお願いしてある。災害時に備え、本部に食料・飲料水の準備をしている。	隣接する同じ法人と一緒に避難訓練を行っている。災害時に備え医療、介護用品の備蓄はしているが食料品はまだ整っていない。災害時は近隣の団地の方々の協力が得られるように自治会にお願いしている。	

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	本人の人格を大切に、プライドやプライバシーを尊重した言葉かけや対応を心掛けて いる。	気持ちの良い言葉かけをするように努めて いる。トイレへの誘導は小声で声かけを行って いる。 プライバシー保護、個人情報の漏えいに対する 研修を開設前に行っているが、記録が無い。	毎年継続的な研修を行うように希望 したい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、 自己決定できるように働きかけている	職員は利用者が生活の中での思いや希望 を出せる様、ゆっくり話を聞いたり、言動を よく観察・把握している。利用者には簡潔に わかる言葉で説明し、希望にあわせて支援 している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一 人ひとりのペースを大切に、その日をどのよう に過ごしたいか、希望にそって支援している	ホームでの決まり事は特になし。起床・就 寝・面会時間など自由に、1日の生活の 流れは、利用者のペースを尊重した支援を 心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるよ うに支援している	利用者は希望や趣味に合わせて髪型・服 装やお化粧などを楽しめるよう支援してい る。理容・美容は近隣で希望の店を利用す る様援助し、お互いに馴染みの関係になっ ている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好 みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準 備や食事、片付けをしている	食事の献立の希望を聞いたり、下ごしらえや片 付けなど得意分野を活かしながら取り組んでい る。また、特別に刻み等の処理の必要な利用者 には味や食べ易さなどを確認し、食事が負担に ならないように援助している。糖尿食の学習会も した。	食事のための買い物や調理の準備など職員と 一緒に行い食事作りを楽しんでいる。隣接する 病院のメニュー表を参考に毎日の献立を考えて いる。食欲が出る工夫も色どりなどで考えて 作っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて 確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に 応じた支援をしている	食事はバランスよく摂取できる様、水分は 1500ccを目安に支援している。食事量の少 ない利用者には、食べやすい調理の工夫 や、栄養補助食品を摂っていただくこともあ る。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一 人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケ アをしている	口腔内の状況により、個々に指導やケアを している。また、ホームで十分な口腔ケアが 出来ない場合には、定期的にけんせい歯科 で訪問診療を受けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	本人のペースで気持ちよく排泄できるよう、排泄パターンや、排泄のサインを見逃さないように注意して誘導している。	排泄のチェック表を作り時間で誘導を行っている。 一人ひとりのパターンやサインを見逃さないように誘導している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘は心身状態の悪化を来し易い、個々の入居者の状況を把握し、朝や就寝前の牛乳やヨーグルト・食事・水分・散歩などの運動と共に、薬の調節も行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴の回数は特に決まりはない、毎日でも可能。入浴時に危険がないよう注意し、その方の能力を引き出し、ゆっくり介助している。音楽や歌で入浴が楽しみになるよう介助している。	1日中循環式の浴槽になっており、いつでも入浴できるようになっている。楽しく入浴できるように音楽や歌などで誘導するように心がけて支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は本人のペースで生活していただいている。必要な方には休養を促す声掛け、援助している。夜間は個々に合わせ就寝介助、不眠の方は飲物や談話をし睡眠の援助をしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医師の診察後は、診察所見と処方された薬については記録に残し、申し送りにて情報を共有し、症状の変化や副作用についても観察している。訪問薬剤師とも情報交換し指導を受けている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの生活や家事等の能力を活かした活動をしていただいている。「ありがとうございます」「お上手ですね」などの声掛けを必ず行い、自信と意欲が持てるよう心掛けている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	個別あるいは複数で、買物・散歩・ドライブ・お祭・美術館・若い時過ごした場所や併設のデイサービスの見学など、その方の心身の状況や希望に応じて援助している。家族には散歩や外食の介助などお願いしている。	季節ごと(梅、桜)や美術館などにも出かけている。併設のデイサービスへ見学に出かけたり、買い物、散歩、ドライブなどの支援を行っている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	小遣いは本人の希望に合わせ少額のお金を財布に入れて支援している。買物時、財布からお金を出すなどをしてもらっている。お金を使えない方にも、初詣や子供神輿のお賽銭などお金を使う機会を作っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族から贈り物が届いた時や誕生日等に本人の家族と電話していただく事もある。年賀状の書ける方には出せるよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングには利用者の写真や花などを飾り、リラックスできるようにし、排泄物等の匂いなどがしないよう心がけている。また、リビングから畑が見え、花の多くある時季は利用者が気軽に外に出て、花摘みや畑の手入れが出来るようにしている。	共用空間にはソファもあり、ゆっくりくつろげるスペースがある。フロアから見える所に畑や花壇を作っており、身近に自然に触れ季節感を感じることができる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングにはテレビ前や詰所前にソファを設置している。職員は利用者の言動に注意し、表情が陰しくなったり、落ち着きがなくなった利用者として少し離れた場所で談話をしたり、思いに傾聴したりしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には原則として家具は自宅で使用していたものや好みの物、家族の写真、好きな音楽が入ったCDラジカセなどを置いていただき、くつろげる様にしている。	居室には使い慣れた家具や、家族の写真などもあり、本人が居心地良く過ごせるようになっている。 週1回の環境整備の日には職員と一緒に部屋の整理を行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者が動きやすく生活しやすいよう、リビング内にテーブルやソファを配置している。ぶつかったり、転倒しないよう配置に注意している。		